

紀元前三万二千年頃のフランスのシオーヴェ洞窟遺跡から松明の燃えた煤の跡が残っています。紀元前四千年頃のエジプトで獣脂を使った燭台

が発見されています。その後、ツタンカーメンのお墓から蜜蝋キャンドルを使ったであろう燭台が見つかっています。ローマ皇帝によって公認されたキリスト教の修道士などに使われていた。西暦五百年代になると日本にも仏教伝来とともに蜜蝋ローソクが伝わり

# ローソク

仏事には大切な基本の三種類のお供え物があります。「香・華・灯燭」です。最初はお線香の香り、そして花の美しさとローソクの光です。

光は仏に捧げるだけではなく、その明るさは本人だけでなくまわりの皆を照らします。永平寺の台所の入り口に掛けてあるすりこぎは自らを削りながら、ローソクは自らを燃やしながら周りを照らす「滅私の奉仕」です、暗闇に視界を開くのです。あたかも悩みの暗闇から、希望の方角を照らすように。

仏教では苦しみの根源である迷いや煩悩を「無明」と云います。人生は苦しいことの連続ですが、少しでも煩悩を静めて苦を減らし、希望の明るさを求める努力をしましょうと、お釈迦様は教えておられます。



TOUGEN NEWS

7月1日 (土曜日)

発行所 桃源院  
発行責任 桃源院 広報部  
〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4  
〒987-1304 大崎市松山千石本丸49  
編集 富田琢磨 田中高文  
http://www.momo.or.jp/



ローソクの炎は一定ではないんですね。ゆらゆらしていますよね。この不規則なゆらゆら感がリラックス効果を生むんです。脳神経を弛緩させるんです。脳内にβ-エンドルフィンなどの快感ホルモンを分泌させ、免疫細胞を活性化させ、治癒力を高める効果もあるんだそうです。

この、ゆらゆらは、木の葉のサササと風になびく音、小川のせせらぎ、星の瞬き、水面の波、小鳥のさえずりなどと同じです。一定ではない自然界のリズムなのです。これが自然界のリズムと繋がる自律神経を整えてくれ、心地よさを与えてくれるのでしょう。

ました。当時はとても貴重なもので、宮廷とか寺院で特別な儀式に用いられました。平安時代になり遣唐使が廃止され唐との交易が衰退するとともに、蜜蝋ローソクも姿を消しました。代わって出てきたのが松脂ローソクです。室町時代になってウルシやハゼ(櫨)で和ローソクが作られ始めました。江戸時代になってハゼの植産が始まり、和ローソクが出回るようになりまし。しかし、かなり高価で、庶民が手にするようになるのは、江戸後期になってからのことですね。夜道を照らす提灯とローソクは切っても切れない仲で、当時の風物詩でもあります。一八五〇年頃にイギリスで石油が原料のパラフィン・ワックスから今の西洋ローソクが作られました。日本でも遅れること数十年後にはこのパラ

フィンローソク、今の一般的なローソクが量産されるようになったのです。私達は古今東西、喜びの結婚式や、悲しみの儀式に必ずローソクをともして来りました。ダイアナ妃を悼むイギリス国民、同時多発テロ事件の犠牲者を悼むアメリカ国民、両国民のローソクをともしてのおびただしい人々の祈りの姿が思い出されます。ほぼ世界の宗教はローソクをともして祈りを捧げます。



## ローソクの効能

静かに揺らぐ炎をみると、心が安らぎます。燃えさかっているはずの熱い炎がどういっわけか私たちの心を静めてくれるのです。心が荒れていれば、余裕がありません。荒波にもまれて沈没しそうな船の上では全く余裕がないのと同じです。心が静まれば余裕が生まれます。穏やかな波を航海中の船の上では、海図や羅針盤の確認にも余裕ができます。正しい方向に進めるのです。ローソクを仏壇にともしながら、揺らぐ炎の作用で静まる心で、み仏に祈り先祖に感謝を尽くすのです。

更に先に逝かれた、あの方から、穏やかな波のような慈しみと、海図や羅針盤のように、智慧と進むべき方向を教えてください。今後、文在寅新大統領が政権を担います。



2016年11月5日 ロッテホテル前





ハンバーグ風  
ローソク

痛烈な言葉で弟子たち

よれば、これは生ける屍体である。だから、最初から如来の禅などと思ってもよらない。それよりも山門のあの仁王さんや不動さんに学ぶがよい。仁王さん、不動さんに学べば、おとなしいだけの去勢されたような、おとなしい仏教徒には決してならない。

を厳しく指導している様子を想像することができ。修行は眼を据え、拳を握り、歯きりしてすべきものだ。まるで戦場を駆けまわるような武人のようだ。戦場で出会うのは外なる敵だが、仏道で出会うのは内なる煩惱の敵である。山門に立ちまはる仁王のように目を剥いて、群がる百千の敵を一步も入れぬようにせよ。この気迫がなくては、仏道の「ぬけがら」になるぞというのである。

師、一日示して曰く、近年仏法に勇猛堅固の大威勢有ると言う事を唱え失えり。只柔和に成り、殊勝に成り、無欲に成り、人能くはなれども、怨霊と成る様の機を出す人無し。何れも勇猛心を修し出し、仏法の怨霊と成るべしと也。



勢至菩薩 奈良国立博物館 蔵



永平寺 僧堂

「大精進菩薩」(勢至菩薩)という菩薩は、勢いのある「勇猛菩薩」とも称する。この頃の仏教信者は、この勇猛心を失って、ただおとなしく、柔和であればそれでよいと思ひ、無欲でひかえめであればそれでよいと思っている。それで一応人柄は良くなるけれども、煩惱という敵の大軍を追い払うことができない。そんな弱々しいことでは



永平寺

駄目で、ひとたび仏道に入ったからには「仏法にとりついた怨霊」となつて、死にかわり生きかわり百代も千代も先までたたり続けるほどでなくてはならない。これを勇猛心という。

有名な本生譚・ジャータカ『金光明経』第四によれば、摩河羅陀王に三人の王子があり、その三人が竹林を歩いていると、一頭の虎がうずくまっていた。周りに生まれただばかりの七頭の赤やん虎がいた。親の虎は飢えてやせこけ、もう身動きも出来ないほど弱っている。これをみた第一王子は「あの虎は、いよいよ餓死するという瀬戸際になればきつと自分の生



正法寺の創建は貞和四年(一一三四年)に無底良紹禅師によって開創しました。東北地方の曹洞宗の中心的存在で、当時は永平寺や総持寺と同格の奥羽二州の本山の格式を持つていて、末寺は五〇八カ寺とも二〇〇カ寺とも言われていました。近世に入った元和元年(一六一五)伊達藩は、正法寺の本寺としての格を無くします。寺領を七十五石与えるなど庇護し、火災によって失われた堂宇の再建も藩費を投じて行われました。正法寺

は現在でも七十三カ寺の末寺を持ちます。本堂は日本最大の萱葺屋根を持ち国重要文化財に指定され、文化四年(一一八〇七)に建立された庫裏も同様に指定されています。正法寺最古の建物である総門は寛文五年(一六六五)に建てられ同じ国重要文化財、庫裏に付属する鐘楼は奥州市指定有形文化財となつています。又、正法寺の本尊である「如意輪観世音菩薩坐像」は鎌倉時代後期の寄木造りで岩手県指定文化財として毎年十月十六日熊野大権現大祭の際に御開帳されます。

本春より、僧堂が再開され、日々激しい修行が行なわれています。

現在の修行僧の指導を行っている「後堂」という役職を、近くの三本木天性寺の渡辺了英老師が担っておりま

岩手県奥州市水沢区黒石町字正法寺二二八

# 新緑の岩手路



蘇民祭裸参り

午後十時ごろから行われる蘇民祭の最初の行事で、禪を締めた男たちが、それぞれ一年の

黒石寺は、寺伝によると、天台宗の行基が天平元年(七二九)に薬師如来像を造り、東光山薬師寺を建立したが、延暦年間(七八二〜八〇六)に戦火にあい薬師寺が焼失。その後、嘉祥二年(八四九)に円仁が復興して妙見山黒石寺と名を改めました。



次に堂裏の高台にある妙見社に移り、五穀豊穰、災厄消除を祈る。これを三回繰り返します。かつては、本堂で拝んでいる和尚に向かつて悪口を言う風習があったと言われています。

岩手県奥州市水沢区黒石町山内十七

願いを記した角燈を手に持ち、瑠璃壺川へ向かいます。ここで各自水垢離をして、「ジャッソウ、ジャッソウ」、「ジョヤサ、ジョヤサ」の掛け声で薬師堂を一巡りして、参拝し、



達谷窟(たつこのいわや) 切り立った崖に建つ毘沙門堂、斜面に彫刻された巨大な仏像、一三〇〇年の歴史を感じさせる神秘的な光景は、静寂な空気に包まれている。古い伝説の香を放っています。



栗駒山に源を持つ、磐井川の浸食によって形成された巖美溪。奇岩、怪岩、深淵、滝と、訪れる人々を魅了する景観が約二キロメートル続きます。流れが磨いた岩肌とエメラルドグリーンの水流の眺めは名勝天然記念物に指定されています。

